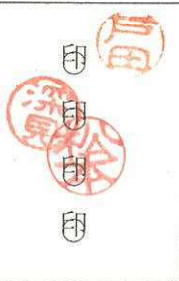


論文審査の結果の要旨

報告番号	博(水・環)甲第67号	氏名	坂井 伸子
学位審査委員	主査 副査 副査 副査	戸田 清 深見 聡 松本 健一	
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>坂井伸子は長崎大学教育学部を卒業後、小学校教員を経た後、長崎大学大学院教育学研究科修士課程を修了し、修士(教育学)の学位を取得した。平成25(2013)年4月に長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科博士後期課程に入学し、現在に至っている。同氏は水産・環境科学総合研究科に入学以降、『十六夜日記』の研究に従事し、長期履修、休学を含むため通常より遅れたが、研究結果を令和2(2020)年12月に主論文“『十六夜日記』「路次の記」の研究”として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文4編(うち査読論文2編)を付して、博士(学術)の学位を申請した。</p> <p>長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授会は、令和2(2020)年12月16日の定例教授会において論文内容などを検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、ZOOMで公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を令和3(2021)年2月17日の水産・環境科学総合研究科教授会に報告した。</p> <p>『十六夜日記』「路次の記」について、古くは和歌の見本帖的要素から、歌論書とみなされたり、明確な旅の目的と行程、時間・空間の移動等の整合性から紀行文とみなされたりと、評価が揺れ続けてきた。近年では、それらの枠組みを外し、作品の作られた時代背景に戻しての分析が注目されている。本研究でも、歌論書や紀行文といったジャンルの枠をいったん解体し、一つの文学作品として『十六夜日記』を考察した。ジャンルの観点から自由になることで、『十六夜日記』の持つ表現の工夫や虚構性、新たな文学的試みに気づくことができると思われる。実際、『十六夜日記』には、歌論書や記録的要素が強い紀行文の範疇には収まらないような、創作的要素に基づくと思われる虚構や表現の形跡が見られる。</p> <p>各章の概要は以下の通りである。</p> <p>序章では、研究目的や研究史、阿仏尼の生涯、各章の概要について述べた。</p>			

第1章「『十六夜日記』の虚構性について」では、『十六夜日記』「路次の記」の「宇津の山」の場面について考察を行った。『十六夜日記』の多くの注釈書では、宇津の山での記述を、事実そのままとして解釈している。しかし、伝統ある歌枕である「宇津の山」での記述は、『伊勢物語』を踏襲し、あたかも業平の東下りを再現しているかのごとく書かれている。そこで、同時代の紀行文における「宇津の山」の記述と比較したうえで、「路次の記」の表現について分析し、虚構が織り込まれている可能性やその意図について言及した。

第2章「『十六夜日記』「路次の記」の月に関する一考察」では、『十六夜日記』「路次の記」における「月」の表現方法について論じた。「路次の記」には、多く「月」が登場する。本章では、『十六夜日記』の「路次の記」における「月」の描写を全て抽出し、どのような表現形態なのかを分類し、考察を行った。その際、『十六夜日記』に登場する「月」の形や、見えている方角と京から鎌倉までの行程の位置関係についてもあわせて考察した。「路次の記」における「月」を総合的に分析することで、作者の心象と「月」の表現技法について明らかにした。

第3章「『十六夜日記』「路次の記」の和歌表現—歌枕を指標として—」では、『十六夜日記』「路次の記」の和歌の中から、特に和歌表現に注目して、分析・考察を行った。元来『十六夜日記』では、伝統的な歌枕の和歌表現について注目されてきた。本章では、歌論書や同時代の紀行文と比較し、伝統的和歌世界から逸脱した新奇な地名の和歌表現についても体系的に分析していくことで、和歌史・表現史における『十六夜日記』「路次の記」の特色・意義について論じた。

第4章「『十六夜日記』「路次の記」にみられる特異な地名詠についての考察」では、和歌の世界で馴染みの薄い地名詠について分析を行った。特に、先行歌の有無について調べ、『十六夜日記』「路次の記」の独自性に言及した。また、先行歌がある場合には、どのような影響関係が見られるのか、それらの地名詠の表現技法と文化圏からの影響関係についても論じた。

終章では、研究の結論と成果、今後の課題について述べた。

次に本研究の独自性、新規性について要約する。

本研究では、『十六夜日記』「路次の記」を読みかえすことによって、これまで歌論書や紀行文といった観点から分析されてきた『十六夜日記』研究に対し、これらの枠組みを一旦取り外すことによって見えてきた記録性とは相反する創作的要素を浮かび上がらせた。具体的には、先行研究で取り扱われてきた分析の観点に、他作品との比較という観点を加え視点を広げることで従来の分析では指摘されなかった虚構性や和歌表現の特質に言及し、阿仏尼の創作的要素を明らかにすることを目指した。『伊勢物語』『源氏物語』等の先行文献や阿仏尼の他作品である『うたたね』、歌論書・同時代の紀行文、先行歌等との比較により、『十六夜日記』「路次の記」における表現の特徴をつかむことができるよう分析を試みた。

第1章では、『十六夜日記』「路次の記」の「宇津の山」の記述から、虚構の可能性について考察した。『伊勢物語』や同時代の紀行文との比較、『うたたね』の表現方法等进行分析・考察し、これまでの先行研究では指摘されてこなかった虚構性の可能性について言及した。

第2章では、『十六夜日記』の「路次の記」における「月」の描写を全て抽出し、どのような表現形態なのかを分類し、考察を行った。これまでの研究では、訴訟の円満解決を望む阿仏尼の心を示唆したとされる月の存在について、月の形や方位の分析を加えることにより、月は阿仏尼の旅や鎌倉下向後の訴訟に対する不安を示唆することが明らかになった。

第3章では、『十六夜日記』の「路次の記」における和歌表現について考察を行った。これまでの研究で注目されてきた歌枕を中心とした和歌群と相反する、新奇な地名を詠んだ和歌群があることが明らかになった。

第4章では、第3章で抽出したこれまでに注目されることが少なかった当時和歌の世界で馴染みが薄いと考えられる地名詠について先行歌との関連性について分析し、考察した。それらの和歌には、藤原為家の影響だけでなく、鎌倉歌壇との影響関係など、阿仏尼の文化圏を示唆していることが明らかになった。

以上のように、歌論書や紀行文といった枠を取り外し、『十六夜日記』「路次の記」を読み返したとき、『十六夜日記』には、歌論書や記録的要素が強い紀行文の範疇に収まらない阿仏尼による創作的要素と思われる虚構や表現の形跡が見られることが明らかになった。

本論文で取り上げた観点については、それぞれに新しい発見と課題があった。歌枕は地名であり、その景観や比定に関する分析を深めることで、環境文学・環境史(自然体験、自然観を含む)への寄与も視野に入る。平安時代・江戸時代に大噴火のあった富士山が鎌倉時代には「煙の立たない」印象を与えたこと、昭和時代のヘドロ公害で知られる田子の浦が中世には(実は近代初期まで)「風光明媚」の代名詞であったことが本研究で言及されている。『十六夜日記』「路次の記」の本文における景観・風土を再考することは、「生産性」が重視される現代の課題にも示唆を与えられると思われる。今後の課題としては、史実との比較検討や阿仏尼の文化圏に関する諸問題、さらには教材という視点から国語科教育と社会科教育との融合性や、地理的視点から現在の地名・景観との比定などもあげられる。

本研究の結果は、『十六夜日記』とその時代の文化について、先行研究をふまえて新しい重要な知見を提示したものと評価できる。学位審査委員会は、国文学および環境文学・環境史の分野の発展に貢献するところ大であり、博士(学術)の学位に値するものとして合格と判定した。